The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	和歌山市方言における文末表現「～シテ」
Author(s)	山口, 華奈
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2015, 13, p. 52-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51434
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 13 号（2015 年 3 月）52-71

和歌山市方言における文末表現「～シテ」

山口　華奈

【キーワード】和歌山市方言、確認要求、ではないか、ワシテ、ンヤシテ

【要旨】

本稿は、和歌山市方言において、確認要求の機能を有するもののうち、文末表現「～シテ」を取り上げ、その意味・用法の記述を試みるものである。文末表現「～シテ」の形式的・意味的特徴は、次のようにまとめられる。

（a）文末表現「～シテ」は、平叙文の文末に生起し、概して「ワシテ」という形式をとり、名詞相当の句や節に後接する場合にのみ「ヤシテ」という形式をとる。

（b）文末表現「ワシテ」は、「ではないか」に共通する用法をもち、話し手の発話時と発話以前の間、あるいは話し手と聞き手の間に認識のずれがあり、話し手の発話時の認識を、認識すべき確定的なものとして提示する。

（c）文末表現「ンヤシテ」は、聞き手の認識になく聞き手が知り得ない既定の事柄を伝達し、聞き手と共有していこうとする。

（d）文末表現「～シテ」の「シテ」は、話し手の認識を発話の現場に引き出し、自分や聞き手との共有の認識領域にもってくるべく表出する。

1.　はじめに

和歌山県和歌山市で話されていることば（以下、和歌山市方言とする）には、いわゆる確認要求の機能を有する表現の一つに、以下に示したような文末表現「～シテ」がある。

（1）はよ 行こらってさっきから言うてるワシテ。

（早く行こうってさっきから言っているじゃないか。）

（2）何や、この問題 すごく簡単ヤシテ。（何だ、この問題はすごく簡単じゃないか。）

これらの用例において、文末表現「～シテ」は、標準語の確認要求表現のうち、「ではないか」に相当するように思われる。とりわけ、田野村（1988）における「ではないか」の三分類の中のⅠ類[1] に相当している。ただ、この文末表現「～シテ」は、（1）（2）のような「ではないか」に共通する用法をもつものだけでなく、次の（3）のように、「ではないか」で言い表すことができない、意味的に異なるものを有している。

（3）あの子、今日は熱あるンヤシテ。（あの子、今日は熱があるんだよ。）

また、文末表現「～シテ」は、文末詞「ワ」あるいは助動詞「ヤ」と共起した「ワシテ」

1）　田野村（1988）は、「ではないか」のⅠ類について、発見した事態を驚きや非難などの感情を込めて表現する、あるいは、ある事柄を認識するよう相手に求める、と述べている。

・よう、山田じゃないか。

・何をする、危ないじゃないか。　（田野村 1988）

「ヤシテ」という形でのみ用いられ、「シテ」だけが単独で用いられることはない。

（1’）*はよ 行こらってさっきから言うてるシテ。

（2’）*何や、この問題 すごく簡単シテ。

本稿は、このような和歌山市方言における文末表現「～シテ」[2] について、その意味・用法を記述することを目的とする。本稿では、「ワシテ」や「ヤシテ」などを、それぞれ文末表現「～シテ」の一形式として扱い、文末表現「～シテ」のうち、（1）（2）のように、「ではないか」に共通する用法をもつものを文末表現「ワシテ」、（3）のように、共通しない用法をもつものを文末表現「ンヤシテ」と称し[3]、分析を行う。

以下、第 2 節で先行研究と問題のありかをまとめ、第 3 節で文末表現「～シテ」の形式的特徴を整理し、続いて、第 4 節で文末表現「ワシテ」の意味的特徴、第 5 節で文末表現「ンヤシテ」の意味的特徴、第 6 節で「シテ」の基本的な意味、第 7 節で文末表現「～シテ」の周辺的な用法を、それぞれ考察し、第 8 節でまとめと今後の課題を述べる。

本稿における用例は、主に筆者（和歌山県和歌山市在住（0-22）、外住歴なし）の内省による。用例は、先行研究からの引用を除き、当該表現をカタカナで示し、他の部分を漢字ひらがな交じりで記す。「*」はその文が文法的に不適格であることを、「#」は運用的に不適切であることを、「?」は適切性が劣ることを、それぞれ表す。

2. 先行研究と問題のありか

本節では、和歌山市方言の文末表現「～シテ」を分析するにあたり、その先行研究をまとめる。2.1.節で、文末表現「～シテ」に関する研究を取り上げ、それを踏まえたうえで、2.2.節で、問題のありかを示す。

2.1. 文末表現「～シテ」に関する先行研究

ここでは、文末表現「～シテ」に関する先行研究を概観する。文末表現「～シテ」について言及したものには、楳垣（1938）や村内（1953）、佐藤（1975）などがある。先行研究において、文末表現「～シテ」は、標準語の「ではないか」や「よ」に相当するとされている（楳垣 1938、柏原 2007 など）。

文末表現「～シテ」に関して、和歌山市方言の文末詞について論じた楳垣（1938）は、相手の疑問または否定を強く反駁して決定する意に用いられるとし、和歌山県の方言の文末詞を概観した村内（1953）は、自己の立場や意見を軽く言い張ると述べた。

（4）どこにもない わひて。（どこにもないじゃないか。） （楳垣 1938）

（5）アノヒト アカンテ ユーンヤヒテ。（あの人はだめだと言うのだよ。）（村内 1953）

2） 本稿では、このような「シテ」を用いた文末表現全体を指す場合には「～シテ」とまとめて表すこととする。加えて、「～シテ」は「～イテ」などと発音されることもあるが、意味的に異ならないと思われるため、「～シテ」に統一して表すこととする。

3） 文末表現「ワシテ」は、（1）（2）を見てもわかるとおり、「ワシテ」や「ヤシテ」など、前接形式により異なる形式をとるが、本稿では、それらを代表する名称として「ワシテ」を用いることとする。なお、文末表現「ンヤシテ」は、（3）のように、ノダ形式が固定的に含まれるため、名称をそのようにした。再度、それぞれの節で後述する。

和歌山市のすぐ北に位置する大阪府泉南郡岬町の多奈川方言でも文末表現「～シテ」が用いられ、佐藤（1975）は、「～シテ」の「シ」が呼びかけを表し、「テ」が「～と言うのに」といったこころもちを言外の余情とする訴えの機能をもつと考えた。

（6）アカナヒテー。（だめじゃないの。）　（佐藤 1975）

また、和歌山県紀の川市の桃山町方言の文末表現「～ッショ」について考察した畑中（2001）は、文末表現「～シテ」を「～ッショ」の語源と位置づけた。畑中（2001）によると、「ワッショ」は、「多分そうであろう」ことを推定しながら念を押そうとする表現であり、「ヤッショ」は、既にある事実を断言している表現で、準体助詞あるいは形容動詞に後接する場合に、ある物事や行動に対する原因・理由（言い訳）の表現となる。

（7）A：［桃畑を指して］ハナ　ムチャクチャキレイニ　サイテル　ワッショ。
（花、すごくきれいに咲いているじゃない。）
B：ホンマジョ。（まったくよ。）

（8）A：ナニシテンノー？（何しているの？）
B：バス　マッテンネヤケド、デンデン　ケーヘンノヤッショ。
（バスを待っているのに全然来ないのよー。）　（畑中 2001）

2.2.　問題のありか

和歌山市方言の文末表現「～シテ」に関して、管見の限り、そのような表現があるという程度の言及や用例の列挙にとどまり、形式的・意味的に詳細な研究はなされていない。本稿は、その記述を試みるものであり、具体的には以下のような点を中心に分析を行う。

①生起する文タイプや前接形式など、文末表現「～シテ」の形式面の特徴を整理する。
②先行研究で「半母音 w 脱落で a が前部に吸収される現象」（柏原 2007）などと述べられているような事象を、本稿では「ワ」の「融合」と言い表すこととし、文末表現「～シテ」に見られる融合について言及し検討を加える。
③意味的な差異を考慮して、文末表現「～シテ」を「ではないか」と共通する用法をもつものとそうでないものとに分けて枠を設け、意味・用法の記述を行う。
④文末表現「～シテ」の意味・用法を、「ではないか」などの先行研究の枠組みと比較しながら分析する。
⑤文末表現「～シテ」において、「シテ」が果たす基本的な意味を考察する。

3.　文末表現「～シテ」の形式的特徴

本節では、文末表現「～シテ」の形式的特徴を整理する。3.1.節で文タイプとの共起関係、3.2.節で文末表現「～シテ」のとる形式とその前接形式、3.3.節で文末表現「～シテ」における「ワ」の融合、3.4.節で他の文末詞との共起関係について、それぞれ確認する。

3.1.　文末表現「～シテ」の生起する文タイプ

文末表現「～シテ」は、文タイプとの共起関係に関して、平叙文にのみ生起する。疑問文や命令文、勧誘文などには現れず、推量形とも共起しない。

（9）いつもみんなで行くワシテ。（平叙文）

（10）*今度の休み、どこ行くワシテ？（疑問詞疑問文）

（11）*あんたも明日行くワシテ？（真偽疑問文）

（12）*はよ 行けワシテ。（命令文）

（13）*一緒に行こうワシテ。（勧誘文）

（14）*たぶんあの子も行くやろうワシテ。（推量形）

なお、文末表現「～シテ」は、従属節で用いられず、文末にのみ生起する。

（15）*明日おばあちゃんち行くワシテから、その帰りにでも寄って来るわ。

3.2. 文末表現「～シテ」のとる形式とその前接形式

ここでは、文末表現「～シテ」のとる形式とそれに先行する形式について整理する。文末表現「～シテ」は、基本的に「シテ」だけが単独で前接形式に接続することはない。

まず、文末表現「～シテ」は、動詞述語文と形容詞述語文において、「ワシテ」という形式をとる。

（16）もう桜の花 咲いちゃあるワシテ。（もう桜の花が咲いているじゃないか。）

（17）この番組 おもろいワシテ。（この番組は面白いじゃないか。）

次に、文末表現「～シテ」は、名詞述語文と形容動詞述語文において、「ヤシテ」という形式をとり、ノダ文においても、準体助詞に「ヤシテ」が後接する。

（18）山本さんヤシテ。久しぶりやなー。（山本さんじゃないか。久しぶりだねー。）

（19）何回も行ったり来たりすんの 面倒ヤシテ。

（何回も行ったり来たりするのは面倒じゃないか。）

（20）この子、明日入学式ナンヤシテ。（この子、明日入学式なんだよ。）

ただ、否定形については、述語の品詞に関わらず「ワシテ」という形式をとる。

（21）まだ桜の花 咲いてないワシテ。（まだ桜の花は咲いていないじゃないか。）

（22）この時計 もう使えやんワシテ。（この時計はもう使えないじゃないか。）

（23）そんなん面倒ちゃうワシテ。（そんなの面倒ではないじゃないか。）

過去形についても同様に、述語の品詞に関わらず「ワシテ」という形式をとる。

（24）もう桜の花 咲いちゃあったワシテ。（もう桜の花が咲いていたじゃないか。）

（25）何回も行ったり来たりすんの 面倒やったワシテ。

（何回も行ったり来たりするのは面倒だったじゃないか。）

したがって、文末表現「～シテ」は、概して「ワシテ」という形式をとり、名詞相当の句や節の後にそのまま接続する場合にのみ「ヤシテ」という形式をとる。

3.3. 文末表現「～シテ」における「ワ」の融合

3.2.節で、文末表現「～シテ」が基本的に「ワシテ」や「ヤシテ」といった形式をとることを示した。ただ、楳垣（1938）や佐藤（1975）などの先行研究の用例にも見られるように、和歌山市方言では、それら以外の以下のような形も併せて使用されている。

（26）えらい張り切ってヤッテラシテ。（すごく張り切ってやっているじゃないか。）

（27）はよ 行かな 間に合ワナシテ。（早く行かないと間に合わないじゃないか。）

（28）もう十分食べタシテ。（もう十分食べたじゃないか。）

これらの用例は、本来「やってるワシテ」「間に合わんワシテ」「食べたワシテ」となるところを、「ワシテ」の「ワ」が前接部分と合わさっているように思われる。

本稿では、このような事象を「ワ」の「融合」と言い表すこととする。これは、文末詞「ワ」を用いた文においても生じるものであるが、ここでは、文末表現「～シテ」における「ワ」の融合を形式面から考察していく。

文末表現「～シテ」において、「ワシテ」という形式は、以下のように、前接形式である動詞と融合することが多く、「～テル」（継続）や「～チャアル」（結果）といったアスペクト形式に後接する場合にもよく見られる。

（29）今度行ったら、新しいの こうて来ラシテ（＜こうて来るワシテ）。

（今度行ったら、新しいのを買って来るじゃないか。）

（16’）もう桜の花 咲イチャアラシテ（＜咲いちゃあるワシテ）。

また、否定形でも、「ワシテ」という形式が、前接形式の、動詞述語文の「ン」「ヤン」「ヘン」や、名詞・形容動詞述語文の「～（ト）チガウ」「～（ト）チャウ」と融合する。

（22’）この時計 もう使エヤナシテ（＜使えやんワシテ）。

（23’）そんなん面倒チャワシテ（＜面倒ちゃうワシテ）。

このように、「ワシテ」という形式は、／w／の音を脱落させ／a／の音が／u／や／n／で終わる前接部分と融合する。なお、この非過去形において見られる融合のあり方は、文末詞「ワ」において生じる融合と共通する[4)]。

ただ、文末詞「ワ」とは異なり、過去形に後接する「ワシテ」でも融合が確認できる。

（30）その映画、前に一緒に見に行ッタシテ（＜見に行ったワシテ）。

（その映画は、前に一緒に見に行ったじゃないか。）

（24’）もう桜の花 咲イチャアッタシテ（＜咲いちゃあったワシテ）。

（25’）何回も行ったり来たりすんの 面倒ヤッタシテ（＜面倒やったワシテ）。

一見すると、これは単に過去形に「シテ」が付いただけのように思われる。しかし、例えば（31）（31’）からわかるように、文末表現「～シテ」は、「シテ」がそのまま述部の動詞に接続することはなく、また、融合部分が長音化の形をとらずに用いられる。

（31）その映画、来週一緒に見に行カシテ（＜行くワシテ）。

（その映画は、来週一緒に見に行くじゃないか。）

（31’）a　*その映画、来週一緒に見に行くシテ。

b　*その映画、来週一緒に見に行カーシテ。

すなわち、過去形の後に直接「シテ」が接続するのではなく、過去形に後接する「ワシテ」

4）和歌山市方言では、文末詞「ワ」においても同様の融合が見られ、融合形は非融合形と併せて用いられている。文末詞「ワ」は、以下の用例のように、／w／の音を脱落させ／a／の音が／u／や／n／で終わる前接部分と融合する。

・あの子やったら、まだ教室にイテラ（＜いてるワ）。

・こんだけ起こしてんのに、まだ起キヤナ（＜起きやんワ）。

も、／w／の音が脱落し／a／の音が短音化されて、前接部分と融合すると考えられる。

したがって、文末表現「～シテ」において、「ワシテ」という形式は、以下の表 1 のように、融合形を形成するとまとめることができる。このような「ワシテ」の融合形は非融合形と併用されており、両者の意味的な差異については 4.3.節で検討する。

表 1　文末表現「～シテ」の「ワシテ」という形式における融合のあり方

前接部分		「ワシテ」という形式の融合の例	
非過去形	／u／で終わる場合	行くワシテ＞行カシテ	iku　wasite ＞ iku　asite ＞ ikasite
		ちゃうワシテ＞チャワシテ	chawu　wasite ＞ chawu　asite ＞ chawasite または chau　wasite ＞ chau　asite ＞ chawasite
	／n／で終わる場合	行かんワシテ＞行カナシテ	ikan　wasite ＞ ikan　asite ＞ ikanasite
過去形		行ったワシテ＞行ッタシテ	itta　wasite ＞ itta　asite ＞ ittasite

一方、「ヤシテ」という形式は、先行研究で断定の助動詞「ヤ」と「ワシテ」の融合から出自したのではないかと述べられていた（佐藤 1975、柏原 2007 など）が、現在の和歌山市方言において「ヤワシテ」という形は残っていない。

（19’）*何回も行ったり来たりすんの 面倒ヤワシテ。

（20’）*この子、明日入学式ナンヤワシテ。

しかし、文末表現「～シテ」が名詞相当の句や節に後接する場合も、①文末詞「ワ」の接続のように、「ワシテ」という形式が助動詞「ヤ」に接続し、②過去形に後接した「ワシテ」のように、「ヤ」と「ワシテ」が融合して、／w／の音が脱落し／a／の音が短音化された結果、その形式が専ら用いられるようになったのではないか、と推定しうる。

（32）（ N　ya　wasite ＞ N　ya　asite ＞ ）N　yasite

（※（32）の「N」は、名詞相当の句や節を表す。）

実際の用例を見ると、③名詞・形容動詞述語文であっても過去形の場合には、「N ヤッタワシテ」というように「ワシテ」という形式が用いられている。

（33）あの時、先に言い出したんは、あんたの方やったワシテ。

（あの時、先に言い出したのは、あんたの方だったじゃないか。）

（34）何回も行ったり来たりすんの 面倒やったワシテ。　（＝（25））

なお、第 4 節以降で文末表現「～シテ」の意味・用法について考察していくが、④動詞・形容詞に付く「ワシテ」と名詞・形容動詞に付く「ヤシテ」では意味的にも異なっておらず、両者に文末詞「ワ」と共通する意味・機能を読み取ることができるように思われる。

これらのことから、「ヤシテ」という形式は「ヤ」と「ワシテ」の融合により生じた可能性が見通せ、本稿では、先行研究と同じく「ヤシテ」は「ヤワシテ」から出自したと考えて分析を進めていくこととする。ただ、「ヤワシテ」の用例を確認できていないため、「ヤシテ」という形式の出自に関して、あくまで推論の域を出ないことに言及しておく。

3.4.　文末表現「～シテ」と他の文末詞の共起

文末表現「～シテ」は、以下のように、文末詞「ヨ」や「ナ」などと共起する。

（35）［もらい物のお菓子を勝手に食べたと責められたのに対し］
あんた この前、食べてもええて言うたワシテヨ。
（あんたがこの前、食べてもいいって言ったじゃないかよ。）

（36）自分でするて言うて聞かんノヤシテヨー。好きなようにやらせたって。
（自分でするって言って聞かないんだよー。好きなようにやらせてあげて。）

（37）［失敗を責められている聞き手をかばって］
今度からちゃんと気つけてスラシテナー。
（今度からちゃんと気をつけてするよねー。）

（38）［誰がいつどこへ出張するのかという話になって］
来月、東京へ出張するンヤシテナ？（来月、東京へ出張するんだよね？）

このように、文末詞「ヨ」が付加される場合は、聞き手に対する訴えかけの意味合いが強められ、文末詞「ナ」が付加される場合は、聞き手に確認する、あるいは同意を求める意図が含まれるようになる。この文末詞「ナ」と共起した複合形式については、文末表現「～シテ」の典型的な意味・用法とは異なる部分が生じるため、第 7 節で再考する。

4.　文末表現「ワシテ」の意味的特徴

本節で扱う文末表現「ワシテ」とは、文末表現「～シテ」のうち、「ではないか」（とりわけ I 類）に共通する用法をもつものであり、以下のような形式をとる。

（39）はよ 行こらってさっきから言うてるワシテ。　（＝（1））
（40）何や、この問題 すごく簡単ヤシテ。　（＝（2））

文末表現「ワシテ」は、（39）（40）のように、非ノダ文において「ワシテ」「ヤシテ」という形式をとるほかに、次のように、ノダ文においても用いられる。

（41）［薄着でやせ我慢して震えている聞き手に対して］
ほれ、やっぱり寒いンヤシテ。（ほら、やっぱり寒いんじゃないか。）

（42）［どちらがいいか相談に乗ったが、話し手が薦めたものと違う方を聞き手がレジに持って行くので］何よ、結局自分の好きなやつ 買うンヤシテ。
（何だよ、結局自分の好きなものを買うんじゃないか。）

田野村（1988）や宮崎（2000）などにあるように、「ではないか」の I 類はノダ文においても用いることができ[5]、文末表現「ワシテ」も、それと同様であると言える。

本節では、この文末表現「ワシテ」の意味的特徴に関して考察していく。4.1.節と 4.2.節で、文末表現「ワシテ」の意味・用法について記述し、4.3.節で、「ワシテ」の融合形と非融合形の間の意味的な差異について検討する。なお、本節では、煩雑さを避けるため、用例は「ワシテ」という形式をとったものを中心に挙げる。

5）野田（1997）では、ノダ形式をとった「ではないか」の I 類に関して、この「ではないか」にはノダ形式の有無の対立があるため、「のだ」自体の機能とは区別して考えるべきであると述べられている。

4.1.　文末表現「ワシテ」の意味

文末表現「ワシテ」の意味は、結論を先に述べると、次のようにまとめられる。

（43）話し手の発話時と発話以前の間、あるいは話し手と聞き手の間に認識のずれがあり、話し手の発話時の認識を、認識すべき確定的なものとして提示する。

文末表現「ワシテ」は、これまで触れてきたように、「ではないか」と意味面において重なる部分があり、蓮沼（1995）などで「ではないか」に関して述べられているような意味・機能[6]を、文末表現「ワシテ」も同様にもつものと思われる。

（44）［聞き手のスーツを褒めて］
そのスーツ、なかなか ええワシテ。（そのスーツ、なかなかいいじゃないか。）

（44’）［話し手のスーツの自慢として］
*このスーツ、なかなか ええワシテ。（このスーツ、なかなかいいだろう。）

（45）昔、ここに本屋 あったワシテ。（昔、ここに本屋があったじゃないか。）

（45’）*昔、ここに本屋 あったん覚えてるワシテ。
（昔、ここに本屋があったのを覚えているだろう。）

文末表現「ワシテ」は、（44）のように、話し手の新たな認識を表出したり、（45）のように、話し手の認識を聞き手に訴えかけたりするのに用いられる。それに対し、（44’）のように、聞き手の認識を確認したり、（45’）のように、聞き手の認識を確かめることで同一の認識を共有しようとしたりする、「だろう」のような意味合いでは用いられない。

このように、文末表現「ワシテ」は、「ではないか」と同様に[7]、話し手の知覚や判断、記憶や知識など、話し手の認識を当該命題として扱うものである。この点に関して、文末表現「ワシテ」には文末詞「ワ」と同様の機能[8]が見て取れると言えよう。なお、村内（1953）が自分の立場や意見を主張するとしたのは、この点を述べていたものと思われる。

以下、文末表現「ワシテ」の意味を、文末詞「ワ」と比較するかたちで、①話し手の認識の確定性、②話し手の発話時の認識に対するずれ、③話し手の認識のもちかけ、という三点から詳細に見ていく。

6）「ではないか」に関する先行研究には、蓮沼（1995）の他に、三宅（1994,1996）や、宮崎（1996）などがある。蓮沼（1995）は、話し手の知識獲得の詠嘆的表明が「ではないか」の基本的な機能であるとし、確認用法が、自分との認識体験の共有を聞き手に訴えることに伴う、副次的なものである、との考えを示している。

7）宮崎（2000）では、確認要求の「ではないか」は、聞き手の認識がどうであるかを確かめるものではなく、話し手の認識を基準にして聞き手の認識をそれと同一化させようとするものである、と述べられている。宮崎（2004）でも、同様の記述が見られる。

8）和歌山市方言の文末詞「ワ」は、基本的に、話し手が知覚あるいは判断した認識内容を表明するものである。文末詞「ワ」は、以下のように、当該命題が、①話し手が新たに認識した事柄、②話し手が改めて認識した事柄、③話し手の意志であることを言い表す。
・その服 ええワー。かえらしワー。（その服はいいわー。かわいいわー。）
・確かに、みんなもその映画 ええて言うてるワ。
（確かに、みんなもその映画はいいって言っているわ。）
・そしたら私が代わりに行って来るワ。待ってて。
（そうしたら私が代わりに行って来るわ。待っていて。）
このように、文末詞「ワ」は、単に事柄を述べるのではなく、「話し手の認識によるところでは」といった意味合いを含み、話し手の認識としてそうであることを表明する。

4.1.1.　話し手の認識の確定性

文末表現「ワシテ」は、発話によって示される話し手の認識内容が、自分で見聞きした事実や経験など、確定的であることを必要とする。

（46）［窓の外に目をやると］雨降ッテラシテ。洗濯物 といれやな。
（雨が降っているじゃないか。洗濯物を取り込まなくちゃ。）

（46’）［出先で、急に雨が降りだして］
これは家のほうも雨降ッテラ｛φ／*シテ｝。帰って洗濯物 といれやな。
（これは家のほうも雨が降っているわ。帰って洗濯物を取り込まなくちゃ。）

（47）あの子、いつも学校 自転車で来てるワシテ。よう見かけるわ。
（あの子、いつも学校に自転車で来てるじゃないか。よく見かけるわ。）

（47’）たぶんあの子、いつも学校 自転車で来てるワ｛φ／*シテ｝。
（たぶんあの子、いつも学校に自転車で来てるわ。）

（46）は、実際に目にした内容の発話であり、（47）は、普段の経験に基づいた発話である。そのため、命題内容が話し手の確定的な認識を表しており、文末表現「ワシテ」が用いられる。一方、（46’）は、根拠のない憶測の発話であり、（47’）は、副詞「たぶん」との共起にも表れているように自信のない内容の発話であるため、話し手の確定的な認識とは言えず、文末表現「ワシテ」は用いられない。このことからも、当該命題である話し手の認識が不確かな場合には、文末表現「ワシテ」を用いることできないということがわかる。

これを言い換えると、確定的な事柄をもちかけているため、対人的な発話の場合には、現在聞き手が認識中にないとしても、聞き手も認識しようと思えば認識できると話し手が判断していることが含意される。すなわち、聞き手がどうしても知り得ない、情報をもちようがないと思われる内容を、文末表現「ワシテ」によってもちかけることはできない。

（48）［捜し物をしている人に、そのありかを知っているだろうと責められて］
知らんワ｛φ／#シテ｝。（知らないわ。）

（49）［何度も失敗すると責められて］
今度はちゃんとやるワ｛φ／#シテ｝。（今度はちゃんとやるわ。）

（48）（49）のように、話し手の内的状態や意志について聞き手に対し反発する場合、それらに関する事柄は聞き手にとって把握しがたいものであるため、文末表現「ワシテ」を用いることはまずない。しかし、以下のように、聞き手が客観的に見て認識できる、常識をもってすれば当然に認識できるといった文脈を伴う場合には、文末表現「ワシテ」の使用が可能となる[9)]。

（48’）a　知らんて言うてるワシテ。（知らないって言っているじゃないか。）
b　知るわけないワシテ。（知るわけがないじゃないか。）

9）（48）（49）のような用例を、前川（2000）では、「ヤンカ」について、直接には知り得ずとも想像がつくはずだという話し手の期待を含むとしたうえで、「聞き手への反発」の用法に分類しているが、本稿では、文末表現「ワシテ」のこのような性質を考慮し、「聞き手への反発」の項は立てず、（48’）（49’）のような用例を、後述する②〈共通認識の喚起〉あるいは③〈認識形成の要請〉の用法に組み入れることとする。

c　それ 見たこともないのに、どこにあるか ら 知ラナシテ。よう考えてん。
（それを見たこともないのに、どこにあるかなんて知らないじゃないか。
よく考えてごらん。）

（49’）a　今度はちゃんとやってるワシテ。（今度はちゃんとやっているじゃないか。）

b　もうコツ 掴んだんやから、今度はちゃんとヤラシテ。
（もうコツを掴んだのだから、今度はちゃんとやるじゃないか。）

（48’）a や（49’）a は、命題内容が聞き手の面前の事態であり、それによって聞き手が当然に認識できる状況にあり、（48’）b や c、（49’）b は、（48）（49）に比べ、聞き手が考えをめぐらせれば、当該命題が当然にわかるといった意味合いが付加されている。そのため、聞き手も認識しようと思えば認識できる内容の命題を提示していることになり、文末表現「ワシテ」を用いることができるのである。

4.1.2.　話し手の発話時の認識に対するずれ

文末表現「ワシテ」は、話し手の発話時の認識と発話以前の認識との間、あるいは話し手の認識と聞き手の認識との間にずれがある場合にのみ用いることができる。ここで言う「ずれ」とは、話し手の発話時の認識に対して、自身の発話以前の認識あるいは聞き手の認識が欠落していたり、全く異なっていたりする場合を指す。

（50）あれー、あの子、ええ靴 履イテラシテ。気つかんかったよ。
（あらー、あの子、いい靴を履いているじゃないか。気がつかなかったよ。）

（50’）いつも思うんやけど、あの子、ええ靴履イテラ｛φ／#シテ｝。
（いつも思うのだけれど、あの子、いい靴を履いているわ。）

（51）［落としたキーホルダーを探していて］
ほら、やっぱりここに落ちちゃあったワシテ。
（ほら、やっぱりここに落ちていたじゃないか。）

（51’）あんたの言うとおり、ここに落ちちゃあったワ｛φ／#シテ｝。
（あんたの言うとおり、ここに落ちていたわ。）

（50）は、話し手には発話以前にそのような認識がなく、（51）は、話し手と聞き手との間で認識が異なっているという前提が存在するため、文末表現「ワシテ」が用いられるのに対し、（50’）（51’）は、話し手の発話時と発話以前の認識が、あるいは話し手と聞き手の認識が一致しているため、文末表現「ワシテ」を用いると不自然な文となる。

4.1.3.　話し手の認識のもちかけ

文末表現「ワシテ」は、話し手自身あるいは聞き手に認識を改めるよう要求する。

（52）店 変ワッチャアラシテ。せっかく気に入ってたのに。
（店が変わっているじゃないか。せっかく（前の店が）気に入っていたのに。）

（52’）店 変ワッチャアラ。（店が変わっているわ。）

（53）A1：リモコン 知らん？（リモコンを知らない？）
B1：新聞のところにアラ｛φ／#シテ｝。さっき つこたもん。

（新聞のところにあるわ。さっき使ったもん。）

A2：えー、ないでー。どこー？（えー、ないよー。どこー？）

B2：もう、どこ見てんのよ。ちゃんとそこにアラシテ。

（もう、どこを見ているのよ。ちゃんとそこにあるじゃない。）

（52）（52’）はどちらも、話し手が獲得した新たな認識を表しているが、（52）は、（52’）と比べ、話し手の発話以前の認識から大きく書き換わったことを示す。（53）は、B1 で提示された内容を聞き手が理解していなかったため、B2 で、聞き手に対し話し手と同じ認識をもつよう訴えかけている。B1 と B2 を比較しても、文末表現「ワシテ」が、文末詞「ワ」と比べ、聞き手の認識を書き換えようとしているということがわかる。

4.2.　文末表現「ワシテ」の用法

ここでは、4.1.節を受けて、蓮沼（1995）を参照し、文末表現「ワシテ」の用法の細かな分類を行う。文末表現「ワシテ」の用法は、以下の三つに大別できる。

①〈認識生成のアピール〉

これは、「話し手自身が知識を獲得したことを詠嘆的に表明する用法」であり、（54）は話し手の評価を、（55）（56）は話し手が発見した事柄を表明している。

（54）これ、見た目よりおいしいワシテ。（これ、見た目よりおいしいじゃないか。）

（55）外 すごい風 吹イテラシテ。（外はすごい風が吹いているじゃないか。）

（56）おばあちゃん またセイテラシテ。

（おばあちゃんがまたせきしているじゃないか。）

この用法は、話し手が新たにあるいは改めて獲得した認識の表明であるから、話し手の驚きをもって用いられることが多く、対人的に用いられる場合は、聞き手に対し話し手の認識をもちかけるような意味合いを帯びる。

②〈共通認識の喚起〉

これは、「認識的に優位な位置にいる話し手が、自分と同様な認識をもつように聞き手を促し、その成立状態を確認する用法」であり、（57）は視覚による認識の共有、（58）は過去の経験の記憶の共有、（59）は話題の提示、（60）は仮定の提示が表されている。

（57）あそこに赤の箱 見エテラシテ。それ 取ってよ。

（あそこに赤の箱が見えているじゃないか。それを取ってよ。）

（58）それ、この前も同じの こうてたワシテ。

（それ、この前も同じものを買っていたじゃないか。）

（59）昨日もらったプリント アラシテ。それ 間違っちゃあて……。

（昨日もらったプリントあるじゃない。それは間違っていて……。）

（60）今ここに 100 万円あるとスラシテ。何に使う？

（今ここに 100 万円あるとするじゃない。何に使う？）

蓮沼（1995）では、聞き手がまだ気づいていない、あるいは思い出していないことについ

て話し手が認識を喚起する、と述べられており、発話時において聞き手が認識中にないということが前提になっているものと思われる。

文末表現「ワシテ」は、例えば「あるワシテ」のように普通「シテ」が低く発音されるが、この用法では、その発話を導入に話を進めていこうとする場合に、「あるワシテ」のように「シテ」が上昇調となることがある。そのときは、一旦聞き手に確認をとる、あるいは念押しをするような意味合いが感じられる。すなわち、この用法は、文末表現「ワシテ」のうち、聞き手と認識を共有していくという性質が最も表れた用法であると言えよう。

③〈認識形成の要請〉

これは、「通常の認識能力をもっていれば、認識できて当然といった見込みに基づいて、聞き手に認識形成を要請する用法」であり、（61）（62）は、話し手の認識が否定されている状況にあって、話し手がその認識を聞き手に訴えかけ、新たにあるいは改めて聞き手に認識させようとする意を示している。蓮沼（1995）では、認識の共有があらかじめ損なわれている文脈において、その回復を図ると述べられている。

（61）いい加減やめなさい。危ないワシテ。（いい加減やめなさい。危ないじゃないか。）

（62）だからさっきから何回も言ウテラシテ。

（だからさっきから何回も言っているじゃないか。）

この用法は、話し手と同じ認識を認識できて当然なのに聞き手が認識していないという状況を受け、話し手の聞き手に対する非難の意味合いが含まれることになる。なお、楳垣（1938）で、文末表現「～シテ」が聞き手の疑問や否定に反発して決定すると述べられていたのは、この用法に着眼したことによるものと思われる。

4.3.　文末表現「ワシテ」の融合形に関する意味的差異の検討

3.3.節で、文末表現「～シテ」における融合を形式面から分析した。ここでは、「ワシテ」という形式が前接部分と融合した場合（非過去形の名詞・形容動詞に付く場合を除く）に、融合しない場合と比べ、その意味合いに差異が見られるのか検討する。

（63）A1：ここに置いちゃあったやつ、知らん？（ここに置いていたものを知らない？）

B1：［リビングにいるAに対して、キッチンから顔を出して］

そこに｛アラシテ／?あるワシテ｝、机のとこに。

（そこにあるじゃない、机のところに。）

A2：だから、もう見たって。（だから、もう見たって。）

B2：［リビングの机のところまで行って］

もう、ちゃんとあるワシテ。よう見なあよ。

（もう、ちゃんとあるじゃないの。よく見なさいよ。）

（64）A1：私、ゼリー冷やしてなかったっけ？（私、ゼリー冷やしていなかったっけ？）

B1：あんた、忘れたん？この前食ベタシテ。

（あんた、忘れたの？この前食べたじゃない。）

A2：えー、食べてないよー。残しちゃあたし。

（えー、食べてないよー。残していたし。）

B2：誰も食べへんよ、あんたの分まで。

あんた もう全部｛食べてもたワシテ／?食ベテモタシテ｝。

（誰も食べないよ、あんたの分まで。

あんたがもう全部食べてしまったじゃないか。）

（63）において、B1 だけでは、聞き手がまだ話し手と同様の認識をもとうとしていないために、B2 で、再度聞き手に同様の認識をもつようもちかけている。（64）においても、B1 だけでは、聞き手がまだ話し手と同様の認識状態に至っていないために、B2 で、再度聞き手に同様の認識をもつよう要求している。

したがって、入れ換えたときに非文とならないまでも、「ワシテ」という形式が前接部分と融合していない非融合形は、話し手が自分の認識を強く打ち出すのに用いやすい表現であり、その一方で、融合形は、分析的な表現でなくなった分、話し手の認識を訴えかける態度が非融合形よりも緩まったものとなる、と考えられる。

5.　文末表現「ンヤシテ」の意味・用法

本節で扱う文末表現「ンヤシテ」とは、文末表現「～シテ」のうち、以下のように、「ではないか」で言い表すことのできない、「ではないか」に共通しない用法をもつものである。

（65）あの子、今日は熱あるンヤシテ。　（＝（3））

（66）明日の天気、雨ナンヤシテ。（明日の天気は雨なんだよ。）

文末表現「ワシテ」にノダ形式の有無の対立があったのに対し、文末表現「ンヤシテ」は、ノダ形式をとらずに用いられることがなく、ノダ形式が固定的に含まれている[10)]。

本節では、取り立ててこの「ンヤシテ」を文末表現「～シテ」の一形式として扱い、文末表現「ンヤシテ」の意味的特徴について、その意味・用法の記述を行う。

文末表現「ンヤシテ」の意味は、結論を先に述べると、次のようにまとめられる。

（67）聞き手の認識になく聞き手が知り得ない既定の事柄を伝達し、聞き手と共有していこうとする。

文末表現「ンヤシテ」は、文末表現「ワシテ」とは異なり、「ではないか」で言い表すことができず、蓮沼（1995）の枠組みの外で捉える必要がある。この文末表現「ンヤシテ」は、対人的な発話にのみ用いられ、聞き手がまだ認識していない内容を認識させようとする対人的「ンヤ」の機能[11)]と、話し手と同様の認識をもつよう訴えかける「ワシテ」の機

10）文末表現「ンヤシテ」はノダ形式が固定的に含まれると述べたが、名詞・形容動詞述語文においては、ノダ形式を用いずとも、同様の意味・用法を表すことができる。

・あそこに見えてるのが、私の学校（ナン）ヤシテ。

（あそこに見えているのが、私の学校（なん）だよ。）

・あの子、見た目によらず辛いもんが苦手（ナン）ヤシテ。

（あの子、見た目によらず辛いものが苦手（なん）だよ。）

田野村（1990）や野田（1997）などで標準語の「のだ」について指摘されているように、準体助詞が名詞化の機能をもつため、ノダ文と名詞・形容動詞述語文は類似性を有し、このようなことが可能になるものと思われる。

11）野田（1997、2002）は、対人的「のだ」について、聞き手は認識していないが話し手は認

能が接近してできた表現であると考えられる。これは、前川（2000）における「聞き手に未知な情報を持ちかける」の用法に原則として相当する。

文末表現「ンヤシテ」は、以下のように、話し手の驚きや呆れをもってよく用いられる。

（68）お隣の娘さん、まだ若いのに来月結婚するンヤシテ。
（お隣の娘さん、まだ若いのに来月結婚するんだよ。）

（69）この薬 ずっと飲んでるんやけど、全然効かんノヤシテ。
（この薬をずっと飲んでいるんだけど、全然効かないんだよ。）

すなわち、自分にとって想定外の事柄を誰かと共有したいといった話し手の心的態度が、①聞き手が知り得ないと思われる事柄を伝達し、②話題の提示や話の導入を行い聞き手と共有していく文末表現「ンヤシテ」と合致するからである。

以下、この二点から、文末表現「ンヤシテ」の意味を、ノダ形式が単独で用いられた場合と比較するかたちで詳細に見ていく。

5.1. 聞き手が知り得ないと思われる情報の伝達

文末表現「ンヤシテ」は、話し手にとっては確定的であるが、聞き手にとって知り得ないと思われる事柄を伝達する。文末表現「ワシテ」が、4.1.節で見たように、基本的に聞き手も認識できると思われる事柄を訴えかける表現であるため、前川（2000）の指摘にあるように[12]、「ンヤ」との共起によって情報をもちようがないと思われる内容であることを表示したうえで、もちかけを行う。

（70）A：［B の腕時計を指して］それ、どこで こうたん？（それ、どこで買ったの？）
B：ちゃうちゃう、これ 誕生日に もうたンヤシテ。
（違う違う、これは誕生日にもらったんだよ。）

（71）［突然家に遊びに来た友人に対し］
ごめんよー、これからみんなで出かけるンヤシテー。
（ごめんねー、これからみんなで出かけるんだよー。）

（70）では、話し手（＝B）は、聞き手（＝A）の発言から、当該命題が聞き手の想定にないと判断しており、（71）でも同様に、話し手が聞き手には当該命題を把握できないと判断していることが含意される。

逆に、文末表現「ンヤシテ」が、聞き手が推し量ることのできるような命題内容である場合に用いられないことからも、このことがわかる。

（72）［相談に乗ってほしいと会いに来た聞き手に対して］
今日は忙して、時間 取れそうにないンヤ{φ／#シテ}。また別の日でもええか？
（今日は忙しくて、時間が取れそうにないんだ。また別の日でもいいか？）

（72’）［会う約束をしていた聞き手に対して、電話口で］

識している既定の事態を提示し、それを聞き手に認識させようという話し手の心的態度を表す、と論じた。和歌山市方言の「ンヤ」についても、同様の機能をもつと考えられる。

12）前川（2000）では、聞き手の想像の範囲を超えているということが「のだ」により示されている、と述べられている。

今日は忙して、時間 取れそうにないンヤシテ。また後で連絡すら。
（今日は忙しくて、時間が取れそうにないんだよ。また後で連絡するわ。）

（73）［怠けていると陰口を言う聞き手に対して］
あの子はあの子なりに一生懸命やってるンヤ｛φ／#シテ｝。
なんで それがわからんのな！
（あの子はあの子なりに一生懸命にやっているんだ。
どうしてそれがわからないんだ！）

（72）のように、話し手と聞き手が対面しており、当該命題を察することができるような場合には、文末表現「ンヤシテ」が用いられない。一方で、（72’）のように、電話上でのやり取りのため、当該命題を把握できないというような場合には、文末表現「ンヤシテ」の使用が可能となる。また、わかろうと思えばわかるのにわかろうとしない聞き手を非難する（73）のような場合にも、文末表現「ンヤシテ」を用いないのが普通である。

なお、文末表現「ンヤシテ」とノダ形式をとった文末表現「ワシテ」は、見かけ上の区別がつかないように思われるが、その相違も、聞き手が知り得ないと思われる命題内容であるかどうかという、この点に表れることを見ておく。

（74）明日 休みやのに、学校 来やなあかん｛ノヤシテ／*ワシテ｝。
（明日は休みなのに、学校に来なければならないんだよ。）

（74’）A：今日の授業、明日に振り替えなんやて。
（今日の授業は明日に振り替えなんだって。）
B：ほいたら、明日、学校 来やなあかん｛ノヤシテ／ワシテ｝。
（そしたら、明日、学校に来なければならない（ん）じゃないか。）

（75）A：［帰宅して見慣れないものを見つけて］これ 何？（これは何？）
B：それ、お父さんがこうて来た｛ンヤシテ／*ワシテ｝。
（それはお父さんが買って来たんだよ。）

（75’）A：［整理中に身に覚えのないものを見つけて］これ 何？（これは何？）
B：それ、あんたがこうて来た｛ンヤシテ／ワシテ｝。
（それはあんたが買って来た（ん）じゃないか。）

（74）では、休日に学校へ行くということは聞き手には把握しがたく、（75）では、帰宅して初めて目にしたものを、それがどういうものかは聞き手（＝A）の知るところではない。一方、（74’）は、聞き手（＝A）の提供した情報を受けての話し手（＝B）の発話であるため、聞き手にも察しがつき、（75’）は、今は忘れているが聞き手（＝A）が思い出すことは可能だと、話し手（＝B）は判断している。

5.2.　聞き手との情報の共有

文末表現「ンヤシテ」は、話し手が聞き手の認識していない事柄を提供することで、話題の提示や話の導入を行い、聞き手に相づちを打つ側であることを示す。特に、先行する文脈がない場合にそれが顕著に表れる。

（76）A：［同じお菓子をいくつも買い物かごに入れているのを見られて］

あの子、このお菓子 好きナンヤシテ。（あの子、このお菓子が好きなんだよ。）

B：どうりでなー。（なるほどなー。）

（77）A：駅のはたによ、ええ感じのお店 あるンヤシテ。そこへ昨日行って来たんよ。

（駅のそばにね、いい感じのお店があるんだよ。そこへ昨日行って来たのよ。）

B：そうなん？どうやった？（そうなの？どうだった？）

（76）（77）のように、あくまで会話の主導権は話し手にあり、その情報を聞き手と共有していくことが期待されている。

たとえ聞き手の知らない事柄であっても、以下の（78）（79）のように、話し手が聞き手と情報を共有していこうとするよりも、話し手が事情を打ち明けたり、自分の内的状態を聞き手にぶつけたりするときなど、ただ一方的に表出することに重きを置くような場合には、文末表現「ンヤシテ」が用いられない。

（78）［誰にも言わないでいたが］

実は、おじいちゃん 具合悪て、入院してるンヤ｛φ／#シテ｝。

（実は、おじいちゃんが具合が悪くて、入院しているんだ。）

（79）［話し手のすることにあれこれ言ってくる聞き手に対して］

私は自分の好きなようにやりたいンヤ｛φ／#シテ｝。ちょっとそっとしといて。

（私は自分の好きなようにやりたいんだ。ちょっとそっとしておいて。）

なお、このような、話題や話の導入として用いうるという点は、文末表現「ワシテ」と共通していると言えよう。

6. 文末表現「～シテ」における「シテ」の基本的な意味

ここまで、第4節で文末表現「ワシテ」、第5節で文末表現「ンヤシテ」について、それぞれ意味・用法を分析した。文末表現「ワシテ」と「ンヤシテ」の意味を以下に再掲する。

（80）文末表現「ワシテ」は、話し手の発話時と発話以前の間、あるいは話し手と聞き手の間に認識のずれがあり、話し手の発話時の認識を、認識すべき確定的なものとして提示する。

（81）文末表現「ンヤシテ」は、聞き手の認識になく聞き手が知り得ない既定の事柄を伝達し、聞き手と共有していこうとする。

文末表現「～シテ」が文末詞「ワ」などで構成されるにしても、そこに文末詞「ワ」の意味が単純に取り込まれるとは限らない。ただ、上記を踏まえると、文末表現「～シテ」の「ワ」が、話し手の認識として命題内容を表出する機能を担うとすると、「シテ」は、その命題内容の表出のあり方に関与しているものと思われる。

本節では、文末表現「～シテ」における「シテ」の基本的な意味の分析を試みる。話し手の命題表出のあり方に関して、文末詞「ワ」と比較すると、文末表現「ワシテ」と「ンヤシテ」には、以下の三点の特徴を見出すことができる。

文末表現「～シテ」の表出のあり方に着目すると、まず、①不確かな要素を含まない、話し手の確定的な認識が当該命題として表出される。

（82）［時計を見て］うわ、もうすぐ電車 来ラシテ。急がな。

（うわ、もうすぐ電車が来るじゃないか。急がなくっちゃ。）

（83）また自分でする する て言うて、結局いつも誰かにやらすワシテ。

（また自分でする するって言って、結局いつも誰かにやらせるじゃないか。）

（84）今日はバイト、代わってもうて お休みナンヤシテ。

（今日はバイトが、代わってもらってお休みなんだよ。）

（82）は目の前の事実、（83）は記憶された経験、（84）は話し手にとって自明の事実が、発話により示されている。

次に、②話し手の発話時の認識について、自身の発話以前の認識あるいは聞き手の認識との間に、何らかのずれがあるという状況が前提として存在する。上記の（82）は、話し手が発話以前にはそのような認識が欠落していたこと、（83）は、聞き手が話し手と異なる認識をもっていたこと、（84）は、聞き手がそのような事柄を認識し得なかったことが、想定されている。なお、文末表現「～シテ」の多様な用法は、とりわけ、このような話し手の発話時の認識とのずれの相違によるものと考えられる。

さらに、そのずれを埋めるため、③独話的場面では話し手自身の認識を書き換え、対話的場面では話し手の認識を聞き手にもちかけようとする。上記の（82）は、話し手が発話以前にはもっていなかった新たな認識を獲得し、（83）は、聞き手の認識を話し手と同様のものに改めようとし、（84）は、聞き手の認識になかった情報を聞き手に提供している。

したがって、「シテ」の意味は、話し手の認識を発話の現場に引き出し、自分や聞き手との共有の認識領域にもってくるべく表出する、ということにある。

7.　文末表現「～シテ」の周辺的な用法

これまで、文末表現「～シテ」の意味面に関して、その基本的な特徴を分析してきた。本節では、その周辺的なものとして、文末詞「ナ」と共起した複合形式の用法を取り上げる。以下、文末表現「～シテ」の典型的な意味・用法と比較しながら、7.1.節で複合形式「ワシテナ」、7.2.節で複合形式「ンヤシテナ」について、それぞれ考察する。

7.1.　複合形式「ワシテナ」の用法

ここでは、文末表現「ワシテ」と文末詞「ナ」が共起した複合形式について分析する。

複合形式「ワシテナ」は、話し手の認識をもちかけ、話し手の認識ではそう思うが聞き手の認識においてもそうだろう？といった話し手の心的態度を表す。

（85）［失敗を責められている聞き手をかばって］

今度からちゃんと気つけてスラシテナー。　（＝（37））

（86）［レストランでおいしく食事していたが、まずいと聞いて］

ここの料理、おいしいワシテナ？（ここの料理、おいしいよね？）

（85）では、聞き手が第三者に叱られている事態を受けて、（86）では、そのレストランの料理をまずいとする第三者の意見があるのに対して、話し手が自分の認識を主張し、それについて聞き手に確認をとっている。

このように、複合形式「ワシテナ」は、話し手の認識と異なる認識が別に示されてある、

すなわち、話し手と第三者（先行する文脈や状況を含む）の間に認識のずれがある状況下で、話し手が自分の認識を訴えかけると同時に、聞き手も同様の認識をもつか確認を求めるものである。文末表現「ワシテ」において存在していた認識のずれが、話し手と聞き手の間であったのに対し、複合形式「ワシテナ」では、話し手と第三者との間に移行している。なお、複合形式「ワシテナ」は、聞き手に対し確認をとるという点で、蓮沼（1995）で言うところの「よね」の「相互了解の形成確認」の用法[13] に近くなると言えよう。

7.2.　複合形式「ンヤシテナ」の用法

ここでは、7.1.節に引き続き、文末表現「ンヤシテ」と文末詞「ナ」が共起した複合形式について分析を行う。

複合形式「ンヤシテナ」は、話し手がもつ情報を提供し、話し手の認識ではそうであるが聞き手の認識においてもそうだろう？といった話し手の心的態度を表す。

（87）［誰がいつどこへ出張するのかという話になって］
来月、東京へ出張するンヤシテナ？　（＝（38））

（88）［別の班の人にリーダーが誰か聞かれて］
あの子がリーダーするンヤシテナ。（あの子がリーダーするんだよね。）

（87）では、当該命題を知らない第三者に話し手の認識を提示し、それでいいのか聞き手に確認をとっている。（88）でも、同様に聞き手に同意を求めている。

このように、複合形式「ンヤシテナ」は、話し手が命題内容を知り得ない第三者に自分のもつ情報を伝達すると同時に、聞き手も同様の認識であるか確認を求めるものである。文末表現「ンヤシテ」において存在していた情報の有無が、話し手と聞き手の間であったのに対し、複合形式「ンヤシテナ」では、話し手と第三者との間に移行している。

ただ、複合形式「ンヤシテナ」は、このような第三者との認識のずれという状況が存在しない場面においても、聞き手に対する念押しを示したり、（89）のように、聞き手に確認するかたちをとって、その発話を話題や話の導入として提示したりする意にも用いうる。

（89）山本さん、引っ越したンヤシテナー。こないだまで知らんかってよー。……
（山本さん、引っ越したんだよねー。この間まで知らなかってねー。……）

8.　まとめと今後の課題

以上、本稿では、和歌山市方言における文末表現「～シテ」を取り上げ、その意味・用法について記述を行った。明らかになったことをまとめると、次のようになる。

（90）文末表現「～シテ」は、平叙文の文末に生起し、概して「ワシテ」という形式をとり、名詞相当の句や節に後接する場合にのみ「ヤシテ」という形式をとる。

（91）文末表現「ワシテ」は、話し手の発話時と発話以前の間、あるいは話し手と聞き手の間に認識のずれがあり、話し手の発話時の認識を、認識すべき確定的な

13）「相互了解の形成確認」とは、蓮沼（1995）によると、人間に必ず備わっているはずの認識能力である理解力に訴えて、相互了解を形成し、その適合を確認する用法である。

ものとして提示する。

(92) 文末表現「ンヤシテ」は、聞き手の認識になく聞き手が知り得ない既定の事柄を伝達し、聞き手と共有していこうとする。

(93) 文末表現「～シテ」において、「シテ」は、話し手の認識を発話の現場に引き出し、自分や聞き手との共有の認識領域にもってくるべく表出する。

(94) 文末表現「～シテ」の用法は、以下の表 2 のようにまとめられる。文末表現「ワシテ」の用法は、標準語の「ではないか」に共通するのに対し、文末表現「ンヤシテ」の用法は、「ではないか」と共通しない。

今後の課題としては、①「ワ」の融合の分析を、その要因や傾向性などに踏み込んだものにし、②「ヤシテ」という形式の出自や扱い方を明示し、③文末表現「～シテ」独自の特徴を、「ではないか」との相違に着目して考察し、④先行研究で文末表現「～シテ」から出自したとされる「～ッショ」や「～イショ」、さらには、和歌山市方言も含めた関西方言で広く使用される「ヤンカ」などと比較検討を行う必要がある。

表 2　文末表現「～シテ」の用法の分類

	文末表現「ワシテ」			文末表現「ンヤシテ」	複合形式	
	①〈認識生成のアピール〉	②〈共通認識の喚起〉	③〈認識形成の要請〉		「ワシテナ」	「ンヤシテナ」
(ア) 話し手の認識状態	確かである。	確かである。	確かである。	確かである。	話し手にとって確かである。	話し手にとって確かである。
(イ) 話し手の発話時の認識とのずれ方	話し手の発話以前の認識にない、あるいは異なっている。	聞き手の認識にない、あるいは異なっている。	話し手の認識が否定され、聞き手の認識にない、あるいは異なっている。	聞き手は認識しようがない。	第三者の認識にない、あるいは異なっている。	第三者は認識しようがない。
(ウ) 話し手の、聞き手の認識に対する態度	（聞き手が認識しようと思えば認識できる。）	聞き手が認識しようと思えば認識できる。	聞き手が認識しようと思えば当然に認識できる。	聞き手の認識において知り得ない。	聞き手の認識は話し手の認識と同じである。	聞き手の認識は話し手の認識と同じである。
(エ) 話し手の発話態度	話し手が新たに、あるいは改めて認識したことを表す。	話し手が、聞き手に自分と同様の認識をもつよう訴えかける。	話し手が、聞き手に自分と同様の認識をもつよう訴えかける。	話し手が、聞き手に既定の事柄を伝達し、共有しようとする。	話し手が、自分の認識を訴えかけると同時に、聞き手に確認をとる。	話し手が、既定の事柄を提示すると同時に、聞き手に確認や同意を求める。

【参考文献】

楳垣實（1938）「和歌山市方言語法（五）」『国語研究』6-2（本稿は、井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編『日本列島方言叢書 14 近畿方言考②（三重県・和歌山県）』, pp.272-286, ゆまに書房、による）.

柏原卓（2007）「湯浅の方言談話研究」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』57，pp.1-8，和歌

山大学教育学部紀要委員会.
佐藤虎男（1975）「大阪府方言の研究（3）―泉南郡岬町多奈川方言の文末詞（二）―」『学大国文』18，pp.75-92，大阪学芸大学国語国文学研究室.
田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152，pp.109-123，国語学会.
――――――（1990）『現代日本語の文法 I ―「のだ」の意味と用法―』和泉書院.
野田春美（1997）『日本語研究叢書 9 「の（だ）」の機能』くろしお出版.
――――（2002）「説明のモダリティ」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃編『新日本語文法選書 4 モダリティ』pp.230-260，くろしお出版.
蓮沼昭子（1995）「対話における確認行為―『だろう』『じゃないか』『よね』の確認用法―」仁田義雄編『複文の研究（下）』pp.389-419，くろしお出版.
畑中麻衣子（2001）「和歌山県桃山町方言の文末表現～ッショについて」『名古屋・方言研究会会報』18，pp.53-68，名古屋・方言研究会.
前川朱里（2000）「『（ヤ）ガナ』と『ヤンカ』の用法・機能上の相違について―『ではないか』との対比を中心に―」『現代日本語研究』7，pp.77-97，大阪大学文学部日本学科現代日本語学講座.
三宅知宏（1994）「否定疑問文による確認要求的表現について」『現代日本語研究』1，pp.15-26，大阪大学文学部日本学科現代日本語学講座.
――――（1996）「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89，pp.111-122，日本語教育学会.
宮崎和人（1996）「確認要求表現と談話構造―『～ダロウ』と『～ジャナイカ』の比較―」『岡山大学文学部紀要』25，pp.107-120，岡山大学文学部.
――――（2000）「確認要求表現の体系性」『日本語教育』106，pp.7-16，日本語教育学会.
――――（2004）「確認要求形式の類型と互換性」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』18-1，pp.340-356，岡山大学大学院文化科学研究科.
村内英一（1953）「文末助詞の考察」『和歌山大学学芸学部紀要 人文科学』3，pp.48-67，和歌山大学学芸学部.
――――（1982）「和歌山県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 7 近畿地方の方言』pp.169-193，国書刊行会.

やまぐち　かな（大阪大学卒業生）